

## 三菱一号館美術館 (東京駅丸の内北口)

トゥールーズ=ロートレック展 2011年10月13日(木)～12月25日(日)

伊藤誠三

明治の文明開化期の象徴的存在であった丸の内煉瓦造事務所建築群のうち、最後に残った三菱1号館が1968年に解体され資材が保存されていたが、2010年、外壁煉瓦等の追加資材の復元製作を加え、旧姿を忠実に復元再建され、三菱一号館美術館として復活したものである。この復元工事の竣工前には当協会でも見学会を行い、工事上の諸問題について施工者側の話も聞くことができた。再開発の主眼としては容積を最大限に活用した高層の現代事務所建築であるが、低層部にカフェ、レストラン等の集客施設が営業し、薄暗い旧光庭が緑多きかわいいオアシスとなって美術館の存在を豊かにしている。

パリやフィレンツェなどでは旧貴族の旧邸が当時の姿のままに美術館として公開されているものがいくつかある。所有されていた絵画、彫刻が調度品とともに当時の内装のままに展示され、華麗な貴族文化の姿がそのままに感じられるものとなっている。それらの建物と比較するのは場違いではあるが、往時の近代都心建物が当時の姿のままに再現、公開されたのはうれしい。歴史的建造物と雖も、再利用されてこそその保存であると思うからだ。

明治の煉瓦造事務所が原型だけに、各室が小さく、展示絵画も小品がほとんどを占める。展示壁面を多くする意図もあろうか、外光を遮断した空間で、一部、旧暖房施設が残されていたりするが、かつての事務所空間を感じることはいない。絵画展示空間としては全体に暗い感じで照明にもう一工夫必要なのではなかろうか。

ロートレックといえば、記憶に残っているものはポスターとして描かれたグラフィックアートというべきものが多いが、今回はその素となった娼婦たちのスケッチや自画像などの油彩を興味深く鑑賞することができた。特に、自由でのびやかな線によるスケッチや鮮やかな色彩を面で使う手法は東洋画の影響を受けているのではなかろうかと思わせた。

少し前、南仏アルビにあるロートレック美術館を訪れる機会があったが、これは石造の元カソリック司教の館を改装したもので、大きく明るい空間に大作も多く

展示されていた。空間感覚が絵の印象も大きく変えるものだと実感した。



編集担当より：新しい頁として「美術館を訪れる」を連載します。近年、美術館の新設が続き、様々な企画で国内外の美術・工芸品が紹介されています。優れた美術館や興味ある展示企画に行かれた際、訪問記をお寄せ下さい。連絡は伊藤誠三まで